様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８４０１０

研究課題名（和文）16世紀フランスの歴史論と虚構論―歴史の真実に関する論争を介した文学的虚構の擁護

研究課題名（英文）History and fiction in the 16th century France

研究代表者
志々見　剛（SHISHIMI, Tsuyoshi）

日本大学・法学部・助教

研究者番号：４０７３８０６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：16世紀フランスにおける歴史と虚構の境界をめぐる議論の展開を明らかにするため、クセノフォンの『キュロスの教育』と擬フリギアのダレスの『トロイ滅亡史』の受容について分析した。これらは、真正な歴史書と言いうるのかに疑義を挟まれていた著作だからである。本研究は、これらのテクストの受容が、単に歴史記述論に関する理論的な議論の発展に裨益したにとどまらず、歴史と対照することによって詩や虚構を擁護する立場を生み出すことにも繋がったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：For the purpose of making clear how developed in the 16th century France the question concerning a border between history and fiction, we analyzed the reception of Xenophon's Cyropaedia (the Education of Cyrus) and of pseudo-Dares the Phrygian's History of the Destruction of Troy, two classical texts ambiguous about their historicity. Our studies show that the debates stimulated by these texts not only provided the theoretical arguments for the historiographical problems, but also gave rise to the justification of poesy and literary fiction as contrasted with the History.

研究分野：フランス文学

キーワード：ルネサンス　歴史記述論　古典の受容

１．研究開始当初の背景

16 世紀フランスの法曹歴史家たちの歴史論は、ジャン・ボダンの『歴史を容易に知るための方法』（1566）を筆頭に、歴史というものを、修辞学に従属した文芸の一分野から、真実と有用性に基づいた研究対象へと転換する物だった。

これについての史学史的研究は、1970 年代にドナルド・ケリー、ジョージ・ハッパートら英米系の研究者に始まり、それ以降も引き続いてフィリップ・ドゥザンやアンソニー・グラフトンの研究がある一方、フランス圏でもクロード＝ジルベール・デュボワやマリー＝ドミニク・クズィネらによって進められている。

本研究は、このような 16 世紀の新しい歴史論の発展を、古代歴史家の受容のあり方の刷新と関係づけ、文学研究の見地から捉えなおすものである。例えばヘロドトスは、「歴史の父」と称えられる一方、伝聞に基づいて虚偽を混ぜていると疑われ、その証言の妥当性をめぐって、さらにはその文体と倫理性に関してまで、しばしば批判の対象となった。これについてはアルナルド・モミリアーノの古典的論文「歴史記述の歴史におけるヘロドトスの位置」（1958）以来、近年の論集『ルネサンスにおけるヘロドトス』(2012)など、研究が進んでいる。ただ、ヘロドトスをめぐって繰り広げられた歴史論的議論は、真実と虚偽・虚構の境界をどう定めるか、というより大きな問題と関わる。他の古代歴史家の受容においても、同様の問題が生じる。例えばシチリアのディオドロスを初めとするギリシャ語歴史家が特に神話時代を語る際に虚偽を混ぜていると批判される一方、クセノフォンの『キュロスの教育』は、その虚構性が明白に認められていたにもかかわらず優れた歴史書として評価されるなど、真実と虚構の境界は非常に錯綜したものだった。また、これらの歴史家の評価をめぐる議論は、小説・物語（ギリシャ小説、騎士道物語など）や詩（とりわけ叙事詩）を論じる著者たちによっても、しばしば変奏され、援用されているが、これについての研究は未だ十分に行われていない。

私はこれ以前、モンテーニュの『エセー』を同時代の歴史論の関係から読み直すという観点から研究を行い、2013 年にボルドー第三大学で博士論文『モンテーニュの『エセー』における、歴史に関する諸考察』を提出した。この論文は、モンテーニュがボダンを初めとする同時代の歴史論に深い関心と知識を持っていたことを明らかにし、その上で彼が歴史に関する議論を媒介項としながら、人間の知識の曖昧さを暴露し、また「自分をありのままに示す」という『エセー』のエクリチュールを練り上げていることを明らかにしたものである。こうしたモンテーニュ研究と並行して、重要であるにもかかわらず先行研究の乏しい十六世紀フランスの様々な歴史論を分析し、それと文学・哲学作品との関係を考察してきた。具体的に言えば、アンリ・エチエンヌ（二世）の『ヘロドトス弁護』、ルイ・ル・ロワの『世界における事物の変転と多様について』、ニコラ・ヴィニエの『歴史叢書』、そしてアンリ二世の修史官ピエール・パスカルとプレイヤード派の関係などである。

こうした研究の蓄積の上に、16 世紀フランスにおける古代歴史家の受容のあり方を検討することで、虚構と真実との境界をめぐる議論を明らかにしたいと考えた。これが研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

本研究は、これまで行ってきた研究を延長して、16 世紀フランスにおける真実と虚偽・虚構の境界をめぐる歴史論上の議論を跡付けた上で、それを踏まえた文学的な諸問題――虚偽や虚構の認識論的・創作論的位置づけや修辞学との関わり、文学ジャンルの区分等――と結びつけて再検討しようとするものである。

具体的には、虚偽や虚言、虚構を含むと見做された古代歴史家たち――とりわけヘロドトス、シチリアのディオドロス、クセノフォンの『キュロスの教育』など――がどのように批判され擁護されたか、あるいはその評価にどの程度の幅や変化が見られるかを、16 世紀フランスの歴史論、翻訳類、文学作品などを通して検討する。その上で、こうした「真実」と「虚偽」・「虚構」の境界が問い直す議論が、いかに同時代の文学的想像力を刺激し、また詩や物語の虚構性を正当化するための跳躍台となったかを明らかにすることを目指す。

３．研究の方法

文献を網羅的に蒐集し、それを読解・分析することが研究の基本となる。特に、歴史書の序文など、必ずしも独創的とは言えないテクスト類にも目を配り、当時共有されていた議論の前提を確認する。そのためには、必要に応じて、しばしば議論の枠組となっている、古典古代や中世、イタリアのルネサンス期などにも目を配る必要がある。

手順としては、(1) 対象となる著作の目録を作成し、資料を蒐集する。本研究のテーマについては先行研究が不十分なだけに、この作業は不可欠である。日本で入手が困難なものは、長期休暇を利用してフランスの国立図書館などで資料蒐集を行う。(2) 真実と虚偽・虚構の狭間にあるとされた歴史家たちがどのように扱われているか、という観点から、入手した資料を読解、分析する。

最終的には、雑誌への投稿論文等の形で、得られた成果を発表することになる。

４．研究成果

主な研究成果としては、クセノフォンの『キュロスの教育』に関するもの、フリギアのダレスの『トロイ滅亡史』に関するものの二点がある。

研究を始めるに当たり、先行研究を整理しながら、どの古代作家が最も鮮明に真実と虚構をめぐる問題を提起しているかを考え、研究を進める上での優先順位を検討した。既に部分的に扱ったことのあるヘロドトスやシチリアのディオドロス『歴史叢書』も含めて検討した結果、クセノフォンの『キュロスの教育』の受容について考察するのが最適と判断した。

かくして研究成果の第一としては、『キュロスの教育』の受容について分析し、論文を発表したことが挙げられる（*Seizième siècle*, n°12, 2016）。『キュロスの教育』については、これを真正な歴史書と見る立場と、全くの虚構と見る立場との二つにはっきりと分かれ――その淵源はキケロによる「[この著作は]歴史の真実のためではなく、正しい君主の範を示すために書かれた」という評価がある――、そこから歴史というもの自体の定義の揺らぎが明らかになった。世俗的な意味での歴史の領域においてもこの著作の評価には大きな揺らぎがあったが、それに加えて、キュロスという人物が聖書の重要な登場人物の一人でもあることから、とりわけ改革派の陣営で、聖書解釈と結びついた歴史論の枠内で扱われていることが判明した。『キュロスの教育』はそれでも世紀後半になるにつれて次第に歴史の枠から排除されていく傾向にあるが、世紀末になると、人間の可能な在り方について問うモンテーニュ、古代ペルシャの風習・制度を考察するベルナベ・ブリッソン、歴史的な真実を凌駕するものとして詩的な真実を称揚するフィリップ・シドニーらによって、狭義の歴史論からははみ出すような領域において、また新しい見方が提出されることになる、という点も示すことができた。最終的には、フランスという枠を超えて、『キュロスの教育』の重要性を明らかにすることができたのである。

研究成果の第二としては、詩（特に叙事詩）と歴史との境界についての議論を追う中で、トロイ戦争の真正な歴史家とされたフリギアのダレスの『トロイ滅亡史』（実際は古代末期の偽書）の受容が興味深いものであることを発見し、これを分析した（『桜文論叢』、90 巻、2015）。ホメロスの叙事詩が詩的自由を享受するゆえ歴史の真実からは逸脱したものだと考えられたのに対して、ダレスは中世以来、「異教の最古の歴史家」（セヴィリアのイシドロス）として、大きな名声を博した。これについて、詩と歴史とのジャンル上の区別の変遷を明確化し、その上で、フランスのトロイ起源説を下敷きにしたジャン・ルメール・ド・ベルジュの『ガリアの栄光とトロイの驚異』と、それを暗々裏に批判していると思われるダレスの仏訳者シャルル・ド・ブルグヴィルとの比較検討を通じて、16 世紀の中葉以降、歴史と詩的虚構との峻別が次第に厳格化していく点を指摘した。このテーマについては、ホメロスの受容との対照、そしてロンサールの『フランシアード』のごとき叙事詩との対比から、さらに研究を深めることもできると思われる。

以上のように、クセノフォンの『キュロスの教育』、擬フリギアのダレスの『トロイ滅亡史』という、歴史記述の周縁部にあるテクストの受容を取り上げることで、16 世紀フランスの歴史と文学、真実と虚構との関係を考える上で、大きな成果があった。

ほかに、本研究で得た知見を活かしながら、モンテーニュと同時代の歴史論との関係をめぐる問題について、研究会等で発表する機会を得た。これは、専門領域の異なる研究者たちの意見を頂くことができて、非常に有意義だった。

最後に、当初の計画を多少修正することになった点についても言及したい。一つは、研究の途上で発見した擬フリギアのダレスの受容が、興味深い鉱脈として浮上したことがある。これについては上に述べたとおりである。もう一つには、当初、可能であれば研究対象に組み込みたいと考えながらも結局取り上げずに終わったものとして、ヘリオドロスの『エティオピア物語』を筆頭とするギリシャの古代小説の類がある。このテーマについては、第一にローランス・プラズネの大部の研究が既にあること、第二にビザンツ経由の影響を考慮しなければならないためかなり大がかりな基礎的調査が必要となることから、今回の研究においては深くは踏み込まないことにした。

今後の展望としては、ヘロドトスやシチリアのディオドロスなど、今回の研究では中心的には扱わなかった歴史家たちについて研究を進めることに加え、例えばルキアノス（『真実の話』、『歴史を書くことについて』）、ポリュビオス、ハリカルナスのディオニシオスなど、これまで先行研究ではあまり扱われてこなかった、ギリシャの歴史・歴史論について、フランスにおける受容やその影響の射程を明らかにしたい。これは、主に理論においてはキケロ、実作においてはティトゥス・リウィウスやサッリュスティウスを範とした、人文主義的な歴史観への異議申し立てとして機能したのではないかと予想されるからである。これらのテーマについては、本研究で得た知見を基盤としながら、今後、さらに深めていくことにしたいと思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

（1）Tsuyoshi SHISHIMI, « La *Cyropédie* en pierre de thouche: débats sur l'histoire en France et en Europe au XVIe siècle », *Seizième siècle*, n°12, 2016, pp. 355-385. （査読あり）

（2）志々見剛「シャルル・ド・ブルグヴィルによるフリギアのダレス仏訳(1572)：トロイ戦争の歴史的考察と,ジャン・ルメール,ド・ベルジュ『ガリアの栄光とトロイの驚異』批判」、『桜文論叢』 90 号, 2015 年, pp.25-50.（査読あり）

〔学会発表〕（計　3 件）

（1）志々見剛「『エセー』における、政治の理論と実践――16 世紀後半のフランスにおけるマキャヴェッリ受容を背景に――」、日本大学法学部学内学会・研究所合同研究会、2016 年 3 月 11 日。

（2）志々見剛「16 世紀フランスの歴史論とモンテーニュの『エセー』」、日本大学法学部総合・外国語合同研究会、2016 年 2 月 4 日。

（3）志々見剛「『エセー』第二巻第十九章「良心の自由について」について――ガリカニスムの英雄としてのユリアヌス」、ラブレー・モンテーニュ研究フォーラム、2015 年 5 月 30 日、明治学院大学。

〔図書〕（計　0 件）

なし。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

特になし。

６．研究組織

(1)研究代表者
志々見剛（SHISHIMI, Tsuyoshi）
日本大学・法学部・助教

研究者番号：40738069

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：